

農家継がぬが実家の農作物販売

「セガレ」都会で農業支援

農家に生まれ、農業を継がずに東京都内で働く二十〜三十代の若者がグループ「セガレ」をつくり、都内で実家の農作物を売る試みを始めた。発足メンバーの一人は、上田市上武石出身の農家長男、児玉光史さん(29)。大地と切り離された消費地と、将来展望を容易には見いだせない生産地をつなぐ新しい農業支援を思い描いている。

発足メンバーはほか 投合。昨年九月、講座のに、兵庫県出身で農家二 講師も務め、農山村支援男の名古屋敦さん(27)、に取り組む俳優永島敏行山形県出身で農家三男の さんの農産物市「青空市渡沢農さん(26)。みな東 場」でデビューした。京在住で、児玉さんは元 児玉さんの実家で生産 ⅠⅠ関係の会社員で今は するアスパラガスをはじめ 大学研究生。ほかの二人 洋ナシといったそれぞれ 「三人とも心のどこかに の実家の作物を持ち寄り、ほかの市も含めてこれまで計四回出店。Ｔシャツに両親の写真をプリントし、「親孝行いかがですか」とユニークな呼び込みの声も響かせ、毎

回完売しているという。は現在約十人。出身地も離農した家や非農家の 広がり、半数は英語に引若者も合わせ、メンバー っかけて「セガール」と



実家の家族の写真をプリントしたＴシャツを着て、農産物を売る児玉さん(左)ら。数時間で完売したⅡ9日、東京・有楽町

上田出身者らグループ結成 消費地と役割に

呼ぶ女性。デザイン制作会社勤務の菅野美香さん(32)Ⅱ岩手県出身Ⅱは「離れていてもできることがある」と楽しげだ。いっそ就農したらⅠとの声もあるというが、児玉さんは「都会の消費者の意識を変えることも貢献はできる」。自らが広告塔となって、肌感覚で「農」に触れる機会が少ない消費地で、安心、安全な農業の可能性を探る考えた。父親の守さん(61)もこうした試みに、「息子を通じて消費者の顔が見えるようでありがいを感じる」と話す。セガレ、セガールの輪をさらに広げ、児玉さんらは今年、上田市に都会の人々を招いた米作りツアーにも挑戦するつもり。「農家に生まれたことが今は自慢のタネ。もっと農業や田舎のことを都会で伝えたい」と意気込んでいる。